

IS研究会の 100回記念研究発表会を迎えるにあたり

市川 照久[†]

情報システムと社会環境研究会（以下 IS 研究会と略す）は、1984年6月に設立されて以来、毎年3～5回の研究発表会を重ねてきたが、2007年6月に100回目の研究発表会を迎える。これを記念して、IS研究会の歩みを振り返り、これからのIS研究会のあり方を展望する。

In Commemoration of the IS Society of the 100th Times

Teruhisa ICHIKAWA[†]

揺籃期(浦時代)

初代主査の浦昭二先生を中心に、有山正孝、伊吹公夫、高木幹雄、槻木公一、中井浩、根岸正光、益田隆司、三浦大亮、三輪真木子、柳原一夫、山本毅雄、若尾暢宏(順不同、敬称略)が提案者になり、本研究会は設立された。設立時に次の2つの目標が設定された。

1. 一般に、組織が情報システムを設計・構築・導入・維持・利用するにあたっての問題点を把握し、これらの問題点を解決するために必要な概念および理論を形成し、それによって各段階についての方法論の確立をめざす。
2. 情報システムと個人、組織および社会との相互の影響の問題点を把握し、その対策を研究する。

この目標に向かって1984年から1987年までの4年間に18回の研究発表会が行われた。この時代は、情報システム(以下ISと略す)はコンピュータサイエンス(以下CSと略す)の基盤の上に成り立つものと位置づける先生が大半であった。これに対し、浦先生は「ISは独自の研究分野であり、CSとは一線を画すものである」と主張され、これに賛同する方々とともにIS研究会が設立された。現在では、ISが世界的に認知され、独自の学会も数多く設立された。

浦先生が長年にわたり主張されているのが、コンピュータを中心においた情報システムではなく、利用者である人間を中心においた情報システムの実現を目指す研究であり、「利用者指向の情報システム」シンポジウムが毎年開催された。図-1は当時の議論の一端を示すものである。

定着期(伊吹・上野・山本時代)

2代目主査の伊吹公史先生(1989～91)が担当された4年間に20回の研究発表会が行われた。1990年にACMか

[†]静岡大学、Shizuoka Univ.

^{*}「情報処理」Vol.48, No.5, pp.530-531 (May 2007)より転載。

らISモデルカリキュラムが発表されたこともあり、日本でもIS分野が広く認知された時代である。

この時代の特筆すべきことは、「情報システムの設計と計画」というテーマでチュートリアルを開催したことである。筆者が本学会の財務担当理事を拝命し、学会の財政改革に取り組んでいた時期でもある。このチュートリアルの講師でもあった筆者は、自分のノウハウを売りたいと主張し、参加費を民間講習会の半額程度に設定していただいた。大学関係者の参加を助けるために無料参加券を配布するという処置も加えて実施したところ、2回に分けて開催するほどの大盛況であり、多額の余剰金を生み出した。金食い虫の研究会という印象を払拭する出来事であり、現在の健全で安定した研究会運営ができる礎になったと思っている。なお、この余剰金はIS研究会の活動資金として現在まで引き継がれている。チュートリアルの成果は、翌年の1991年には培風館から「情報システムの計画と設計」¹⁾という本になって出版され、今でも売れている息の長い本となっている。

3代目主査の故上野滋先生(1992～93)、4代目主査の山本毅雄先生(1994～95)が担当された4年間に20回の研究発表会が行われた。この時代は不況の中で企業のリストラが行われ、各企業の情報システム部門もコストセンタとみなされ、アウトソーシングが進み、学会の企業会員が激減した時期である。このような冬の時代にあつて地道な研究会活動が行われた。

発展期(黒川・神沼時代)

5代目主査の黒川恒雄先生(1996～99)が担当された4年間に15回の研究発表会に加え、3回のシンポジウムが行われた。この時代から研究会の名称に「社会環境」という言葉を追加して研究の対象を広げた。また、その年のホッ

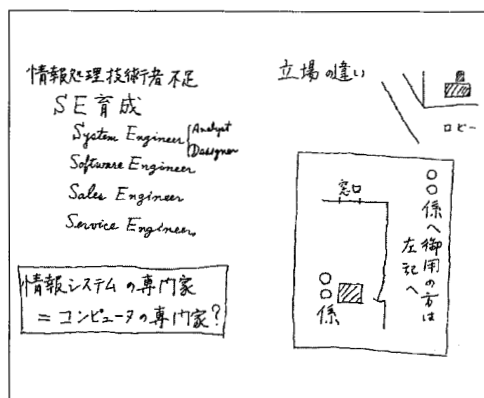


図-1 SEの育成, 立場の違い

トな話題を取り上げたシンポジウムを毎年1回行うことも定例化した。特に、2000年問題がホットな話題になった時期であり、1999年のシンポジウムでは「Y2Kを超えて転換期を迎えた情報システム環境」というテーマを取り上げた。2000年問題を契機に従来のメインフレームを用いたレガシーシステムからクライアントサーバシステムへと移行する企業が増え、ERPパッケージが急速に広がった時期でもある。

6代目主査の神沼靖子先生(2000～03)が担当された4年間は14回の研究発表会、4回のシンポジウムに加え、情報システムモデルカリキュラム(ISJ2001)の作成、ワークショップの開催、FITへの参加など活動の幅を広げた時期である。2003年にはPeter Checklandをお招きしてシンポジウムを開催したことが特筆される。

成熟期(市川～時代)

7代目主査の筆者(2004～07)が担当する4年間に16回の研究発表会、4回のチュートリアルを予定している。特筆すべきことは、2005年にジャーナル「情報システム論文」特集号²⁾(神沼編集委員長)を発行できたことである。その後、2006年のジャーナル「新たな適用領域を切り開く情報システム」特集号³⁾(金田編集委員長)、2007年のジャーナル「情報社会の基盤を築く情報システム」特集号(辻編集委員長)、と毎年IS関連の論文特集号を発行できるようになった。

従来、情報システムは論文になりにくいという印象があったが、故永田守男先生など諸先輩のご努力により、情報システム論文の査読基準⁴⁾が見直され、IS論文特集号を組むことができるようになったことは、ある意味で情報システム学として住民権を持てるようになった証ではなかろうか。ただし、論文の採録率(=採録件数÷投稿件数)は20

%程度と他の分野に比べて低いのも事実である。この事態を改善するために、情報システム論文の書き方ワークショップを毎年数回開催しており、不採録となったいくつかの論文を取り上げ、なぜ不採録になったのか、どのように改善すればよいのかを考えさせる啓蒙活動を行っている。

これからのIS研究会のあり方

ACM, AIS, IEEE-CSの合同プロジェクトで作成されたComputing Curricula 2005レポート⁵⁾によれば、1990年以前はハードウェアの電気工学(EE)、ソフトウェアのCS、ビジネスのISの3分野であったものが、1990年以降EEからコンピュータ工学(CE)が独立し、CSからソフトウェア工学(SE)が独立し、最近ではISから情報技術(IT)が独立し始めている。

米国では経営学部の中にISができた大学が多く、ビジネス寄りの情報システムの色彩が強いが、日本では工学部の中にISができた大学が多いため、コンピュータ寄りの情報システムの色彩が強い。ネットワーク社会における情報システムの接点は一般市民に広がっており、これからの情報システムの重点は、経営でもコンピュータでもなく、人間・社会寄りにシフトしていくように思われる。たとえば、安全安心な市民生活を保障するための防災情報システムの実現がその一例である。

人間・社会寄りの情報システムを実現するためには、単に利便性を追求するのではなく、多様な価値観を持った市民の合意形成が重要な要素となる。高速道路の建設で遭遇している自然保護のように、防災情報システム実現で遭遇するプライバシー保護のような問題が実現の鍵を握るようになる。今後、IS研究会では利便性を追求するユビキタス社会の研究ではなく、人間性を疎外しない情報環境の実現に向かって研究することが望まれる。

参考文献

- 1) 情報処理学会編：情報システムの計画と設計、培風館(1991)。
- 2) 神沼靖子：「情報システム論文」特集号の総括、情報処理、Vol.46, No.4, pp.447-448 (Apr. 2005)。
- 3) 金田重部：論文誌「新たな適用領域を切り開く情報システム」特集号の総括、情報処理学会研究報告、Vol.2006, No.27, pp.53-58 (2006)。
- 4) 永田守男：情報システム論文の書き方と査読基準の提案、情報処理学会研究報告、Vol.2001, No.62, pp.25-30 (2001)。
- 5) The Joint Task Force for Computing Curricula 2005 : Computing Curricula 2005 The Overview Report, A Cooperative Project of ACM, AIS, IEEE-CS (2005)。(平成19年3月22日受付)

市川 照久(正会員)

ichikawa@inf.shizuoka.ac.jp
静岡大学情報学部教授。慶應義塾大学卒業。博士(工学)。三菱電機(株)、新潟国際情報大学教授を経て現職。本会元理事。情報システムと社会環境研究会主査。情報処理教育委員会委員。